

小学校外国語科における評価についての考察

Consideration on Assessment in Elementary School English Education

加藤 みゆき Kato Miyuki

(家政学部こどもの生活学科)

抄 録

2020年より教科としての外国語科が導入され、従来の外国語活動にはなかった「読むこと」「書くこと」が新たな領域として加わった。同時に、科目となったことで評価の必要性が出てきた。これまで外国語活動ではなかった評価を小学校現場ではどのように行ったのか、課題はないかなど、担任に聞き取り調査を行い、課題に対する示唆を探った。聞き取った内容に基づき、文部科学省の『小学校学習指導要領』『学習指導要領解説』『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料』などを再度精査し、指導上の悩みの答を探り、さらに現場で運用しやすい学習支援ツールとしてポートフォリオの導入を提案している。

キーワード

小学校外国語科 Elementary School English Education 評価 assessment 書くこと writing
アルファベット指導 instruction of alphabet writing 小中連携 connection of elementary school and
junior high school ポートフォリオ portfolio

目 次

- 1 はじめに
- 2 調査方法
- 3 インタビュー内容
- 4 書くことの指導と評価方法
- 5 成果と課題

1 はじめに

2020年より、小学校外国語活動が必修化し新たに3, 4年生に導入されることとなり、同時に5, 6年生に教科としての外国語科が新設された。教科化に伴い、従来の外国語活動では実施しなかった「評価」が新たに加わった。

本研究は、2020年度に初めて外国語科の評価を行うにあたり、小学校では具体的にどのように行ったのか、困っている点や改善点はないかなどを、筆者が現場教師に実際にインタビューを行い、今後の評価の在り方への示唆を探ることを目的としている。そのため、本研究では外国語科について論ずることとする。

まず、外国語科の目標と内容を具体的に確認する。
平成29年3月告示の小学校学習指導要領(文部科

学省, 2017a)で、主に英語を扱うこととし、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力である「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に基づいて、目標と内容を設定している。

学習指導要領「第2章外国語科の目標及び内容 第1節 外国語科の目標」(文部科学省, 2017: 156)に掲げられている目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」としており、続いて前述した3つの資質、能力別に外国語科の目標が明確にされている。

(1)知識、技能

外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。

(2)思考力・判断力・表現力等

コミュニケーションを行う目的や場、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。

(3)学びに向かう力・人間性等

外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

これらの目標に加えて、外国語科では英語学習の特質を踏まえ、「聞くこと」「読むこと」「話すこと〔やり取り〕」「話すこと〔発表〕」「書くこと」の5つの領域別に目標設定をし、これらの目標の実現を目指した指導を通して、(1)知識・技能と(2)思考力・判断力・表現力等の資質・能力を一体的に育成するとともに、その過程を通して、(3)の学びに向かう力・人間性等を育成することとしている。

次に、評価について述べる。学習評価とは『評価と指導の一体化』（文科省国立教育政策研究所、2020: 3）によると、「学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するもの」であり、「児童生徒の学習状況を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするため」に行うものである。評価には、学習前に当該単元に必要な知識等を習得しているかを確認する「診断的評価」、学習の過程において個々の児童や学習集団全体の理解度などを確認する「形成的評価」、評価基準に即して学習状況を総括し観点別評価を行うために残す「総括的評価」がある（池田、2020: 13）が、本研

究では、指導要録で求められている記録に残す「総括的評価」について考察する。

観点別評価は(1)「知識、技能」(2)「思考力・判断力・表現力等」(3)「学びに向かう力・人間性等」の観点ごとに「十分満足できる」状況と判断されるもの：A「おおむね満足できる」状況と判断されるもの：B「努力を要する」状況と判断されるもの：Cの3段階で学習状況評価をする。ただし、(3)については、知識、技能等を獲得するために粘り強く取り組む姿勢とその過程で自己の学びを調整しようとする態度は評価することができるが、「思いやり」や「感性」については、こうした評価では示しきれないことから個人内評価を通じて見取ることとしている。

つまり、外国語科は、「聞くこと」「読むこと」「話すこと〔やり取り〕」「話すこと〔発表〕」「書くこと」の5つの各領域別に「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3観点で評価し、学年末に「観点別評価」と観点別評価を総括した「評定」を学指導要録に記載する。

観点別評価のやり方は、全ての単元で5領域×3観点の評価を行う必要はなく、年間を通じてバランスよく評価の記録を残していけばよい。そのためには、児童全員の学習状況を記録に残す場面を精選し、かつ適切に評価するための評価の計画が重要である。

2 調査方法

今回、愛知県内の2つの市立小学校、W小学校、M小学校の外国語科の指導に携わる教員にインタビューを実施した。やり方は、質問紙を用意し、1対1で全員に同じ質問をした。

インタビュー対象者は、W小学校の5年1組、2組、6年1組、2組の担任と専任教員、M小学校の5年生学年主任と5、6年生の外国語指導に専科教員として指導に携わっている校務主任（2021年当時）である。M小学校については、学年主任と校務主任2人同時にインタビューを行った。

以下に小学校別にインタビュー内容を詳述する。インタビューは、テスト、パフォーマンステスト（発表）と同テスト（やり取り）に分けて質問した。しかし、前述の通り、評価は指導と一体化しているため、質問に対する回答は指導についての言及が含まれている。質問紙の内容は以下の通り。

外国語科となり評価、成績付けが必要となりました。評価方法について以下の観点から詳しくお聞かせください。

【テスト】

どんなテストを使用されましたか？

1. 市販のテキストに準ずるテスト
(実施回数 回)
2. 実態に合わせて独自に作成した
テスト (実施回数 回)
3. 1と2両方
4. テストを実施するにあたって、どのような問題点がありますか。

①テストの内容は授業で取り扱った内容を測れているか。

②タイミングや回数

③児童に戸惑いはないか。

【パフォーマンス評価】(発表)

①観点

②評価に関わる人は誰ですか：

HRT ALT その他 ()

③具体的な方法や問題点をお聞かせください。

④評価者によるバラつき等ありますか

⑤タイミングや回数

【パフォーマンス評価】(やり取り)

①児童同士のやり取りの観察方法

授業中

テストとして時間を取って行う

その他

②回数

③評価に関わる人は誰ですか

HRT ALT その他：()

④評価者によるバラつき等ありますか

【児童の振り返りカード】

振り返りカードは成績付けに使用していますか？

3.1 W小学校 (2021.3.22 インタビュー実施)

参加者は5名で、各担任の英語活動、外国語活動、外国語科指導歴は以下の通りである。

5年1組担任A先生、小学校教員歴3年、うち外国語活動指導経験4年生2年間、外国語科指導経験5年生1年間。

5年2組担任B先生、小学校教員歴10年、中学校教員歴5年、うち小学校英語活動指導経験5年生2年間、6年生2年間、4年生1年間、外国語活動指導経験5年生1年間、6年生1年間、外国語科指導経験5年生1年間。

6年1組担任C先生、小学校教員歴6年、うち外国語活動指導歴5年生2年間、外国語科指導経験6年生1年間、その他、1,2年生指導歴3年

6年2組担任D先生、小学校教員歴9年間、うち外国語活動指導歴3,5,6年生8年間、外国語科指導歴6年生1年間

専科教員、指導歴はなし。主に3,4年生の外国語活動を指導しており、外国語科については学期末等にスピーチテストなどを担当している。

W小学校5,6年生の授業形態は、担任とALTのティームティーチングで行い、担任のみで行う時間もある。専科教員は最後に各クラスに計4回入る。

以下に、質問への回答を記述するが、引き出された回答は必ずしも質問紙の1問1答のように対応していない。パフォーマンステスト等のやり方は、基本的にクラスごとに大きな違いはなく学年で統一しているため、クラス別に書き出していない部分もある。

① 5年生 (テスト)

テストは市販の業者テストと実態に合わせて独自に作成したテストを使い、3つの単元分をまとめて業者のテストのタイミングに合わせて行った。回数は前期、後期1回ずつ計2回実施した。初めての英語の筆記テストであるため、児童に戸惑いはないかと尋ねたところ、事前にミニプリントを作成、実施し、その際、アメリカ人ALT (Assistant Language Teacher)が事前に業者テストを見て、問われる内容を強調して伝えてくれたため、児童にとって本番のテストは簡単であった。

独自のテストについては、1対1で担任が単独で授業をする時間に口頭試験を行った。聞き取りテストと、聞いて理解したことを表出できているかを確認するテストを、業者テストの書くテストに合わせ、1対1で前期、後期それぞれに1回行った。

3 インタビュー内容

本章では、学校別にインタビュー内容の詳細を記述する。準備したインタビュー質問は、質問紙に沿って口頭で質問をし、筆者がメモを取った。

テストは、1組では次の内容で行った。

1) What food do you like? What color do you like? などの質問に Apple.のように単語ではなく、I like apples. と文章で答えられるか。

2) 13 と 30 の聞き分けなどの数字の聞き取りと、道案内の単元の理解度テストとして、地図を見ながら「〇〇に行きたい」と教員が伝え、児童は Go straight. などの既習語彙表現を使って目的地への道案内ができるか。

評価の難しさとしては、担任と1対1では緊張してしまいやり取りが上手くできなくなってしまう児童がいることや、ヒントをあげれば答えられる子がいることが挙げられた。評価基準は、「何問か出して、何個言えたか」や「自分ですぐに答えられたら◎」などのルーブリックを作成して評価した。

観点については、業者テストを参考にして入れた。

2組では、聞き取りについて次のようなテストを行った。

1) 道案内の単元についてのテストで、担任による道案内を聞いてちゃんと目的地に行けたかを、児童に行った先の施設名を言わせて確認した。

2) 数字を聞いて書く。

3) under 等を選択肢から選んで書き写す。

② 5年生 (パフォーマンステスト)

1, 2組共に発表 (スピーチテスト) は、新型コロナ感染予防のため、行うことができなかった。非常事態宣言が解除した1月から友達との対面で話すことができた。

児童同士のやり取りについてもスピーチ同様、新型コロナ感染対策で行うことがあまりなかった。

そのようななか、やり方を工夫し、ALTの発話を聞いてプリントで答えさせたり、自己紹介、好きな時間割などの伝え合いを紙媒体で行ったりした。

評価は、授業中にしっかりとプリントに書き込んでいるか、発言しているか、諦めずに取り組んでいるかなどの観点で観察し、態度面を評価した。しかし、観察については、全員が楽しそうに取り組んでいるため、「主体性」を取ることに難しさがあり、手を挙げるか、すぐ反応してできるかどうかなどを基準とした。また、クイズを出し合うときなどに辞典で調べたり、知っている単語を使おうとしている、または調べている児童を「意欲がある」と評価した。児童の自己評価については、全ての科目について、学期の振り返りを書かせる機会があり、英語についても書かせている。

③ 評価、指導上の悩みや問題点

評価は指導と一体化しているため、評価方法、評価基準は必然的に指導上の目指すべき児童の姿に結び付いてくる。ここでは、教科化して感じられる児童の変化や、担任が指導上、困難に感じている点を挙げる。

まず、教科化して児童によい変化が現れたと思われる点は、英語を学外で習っている子が増え、体育など他の科目ができない子が活躍し輝ける時間が増えたことが挙げられた。また、単語を覚えなくてはいけないという意識が芽生え、自主勉強ノートに英語を書いてくる児童も見られるようになった。

一方で、苦手な児童が分からないので、ALTが授業を進め、担任が児童のサポートに回ることで対処せざるを得ない場面もある。

指導上、難しいと感じている点は、教科になってどこまで真面目にやらせるかというメリハリの付け方である。教科化以前は、英語の前には叱らないなど、できるだけ児童が楽しく外国語活動に参加できるようにしていたが、教科化になった今、注意の仕方が分からないという戸惑いがある。

評価と指導については、自治体のカリキュラムに評価基準が示されているが、実際に評価するにあたり、発音の正確さや書くときに単語と単語をどれくらい空けるのが適当なのか、など5年生の発達段階を考慮してどこまでを指導すべきなのかが分からない。

また、「書く」「読む」「話す」のバランスが難しいと感じている。「書くこと」を宿題で出しているのか、漢字ドリルと同じようにやるべきか、英語科出身ではない担任がどこまでやったらいいのかなど、何をどこまでやらせるべきなのかという問題に直面し葛藤がある。

また、教科化に伴い、児童はアルファベットの形、単語のスペリング、意味など覚えるべきことや理解すべきことが増えた。結局は理解し覚えないとアウトプットできないので、それなりの指導にならざるを得ないと感じている。中学校の前倒しなのか、または、中学への準備という位置づけならどこまでやったらいいのか、中学1年生のスタート段階でどこまでやっておけばいいのかなど、指導上の明確な目標が分からないという悩みがある。

④ 6年生 (テスト)

テストは市販の業者テストを各単元の終わりとまとめテストを2回、計10回行った。筆記テストの

CDの音声のペースが速いため、初めの1, 2回目のテストでは2回音声を流したが、英文のキーワードを聞けば問題に答えられるため、児童はすぐに慣れた。しかし、結果に差が出ないため、独自に作成したテストを前期1回、後期に1回実施した。独自テストの内容は、ALTに内容をチェックしてもらい、主に知識を測ることを目的とした。設問は、プリントから単語を書く、並べ替えて文章を作る、英文を読み取って質問に日本語で答える、ALTの発音を聞いて単語を聞き分けるなどである。100点満点のうち平均点は67.68点であった。

しかし、このようなテストに対して次のような疑問を持っている。

授業では、「正確に書き写す」ことはしているが、児童は授業で「書くこと」を意識していないので、児童が感覚的に身に付けた知識を測っていることにはなるのではないか、本当に習ったことを測っているのかという疑問が出てくる。中学校に近い評価方法となり、結果、指導も中学校に近いものにならざるを得ない。

⑤ 6年生 (パフォーマンステスト)

新型コロナによる緊急事態宣言に伴い、前に出て話すスタイルのスピーチは行うことができず、ALTの質問を聞いて挙手で答えさせたり、単元の最後の方に、児童同士のペアでのやり取りを観察したりした。知識、技能についての評価で、聞き取りについては業者テストで正しく選べるかを見ているため、やり取りの評価は発音をメインとし、明らかに違ってないかどうかを評価基準とした。特にルーブリックはない。

また、授業中、目立って発言している児童だけが評価されることにならないよう、友達に教えてあげている姿なども評価に加味している。

児童の自己評価については、全ての科目についての学期の振り返りに、英語について書いてあればそれも評価している。業者テストにも振り返り記述欄があり、具体的にならばことやたくさん書いてある子は評価に加味している。評価基準としては「海外旅行で使いたい」のような記述は漠然としているので△の評価にしている。

⑥ 評価、指導上の悩みや問題点

評価方法は紙面に偏りがちになり、パフォーマンステストが評価できるようにALTと授業を行い、児童を観察している。観察を通して、例えば、友達に教えている子、プリントがすぐに終わる子は分か

っていると判断し評価している。態度面は、単元テストの振り返り欄を参考にしたり、挙手、積極性が見られる、課題と解決策を考えられている態度が観られれば評価する。

問題点としては、5年生から6年生に上がるときにまともにアルファベットを書けない児童もいる。テストがあるならしっかり書けないといけない。このように書くことが入り、評価までとなると、5年生ではやっていない。しかし児童の中には、意識が変わり自分で勉強する子や自主勉強で書いてくる子もいる。結局、書かせることでしか差をつけざるを得ないが、習ってはいるけど児童は意識がないままやっているのでは、評価することに躊躇する。絶対評価は全員◎でもいいが、そういうわけにもいかない。

さらに業者の単元テストについては、英語の知識を問うはずのものが、背景知識で答えられる、絵を見て答えられる問題であり、他教科と同じくらいのレベルにして欲しいと感じている。このままでは、中学校で他の小学校と一緒にあった時に差ができるのではないかと思われる。

一方で、外国語が教科となり、◎、○、△の評定が出ることで、中学との意識のギャップが埋まり、小中連携という意味では評価できる。◎の評定をもらった子は中学への自信につながり、△の子は心の準備ができるのではないか。

インタビューを通して、5年生、6年生どちらも、業者テストでは差がつかない→差をつけるためにテストをすることになる→授業の中での意識や目標とずれてしまうという葛藤があった。

以上のように、担任は評価の難しさを感じると同時に、指導上の葛藤を抱えている。

⑦ 専科教員による評価

先にも述べた通り、専科教員が限定的に5, 6年生の授業にも関わっている。ここでは専科教員によるテストと評価について述べる。

専科教員は独自に作成したテストをUnit毎(全8Unit)に2回行った。1回目のテストは知識を測るテストで単語とI want to ~などのフレーズの習熟度と、教員が一人二役で行う会話の内容理解の10点満点のテスト、2回目はパフォーマンステストで、単元の既習語彙・表現を使ってやり取りやスピーチをやらせて評価した。やり取りは、専科教員と児童個人での1対1と、できるだけ多くの児童とやり取りをさせる児童同士のやり取りを観察した。この時、知識・技能は英語の正確さ、思考力・判断力・表現

力は、くり返し話している様子やジェスチャーを使っていることなどを評価した。評価基準は、よくできているA、普通B、あまりできていないCとした。

評価の難しさとしては、スピーチテストに関して、読み上げるだけの評価をどうするか、一人ひとり聞くときに他の子に対して目が届かない、課題を出すのが一人で目が行き届かない、などが挙げられた。専科教員の評価についての悩みには、単独で授業を行う故の難しさも現れている。

3.2 M小学校 (2021.3.16 インタビュー実施)

当該小学校は中学校で英語教員として勤務経験がある校務主任が、外国語科の専科教員（以下、専科教員）としてALTとチームティーチングで指導をしている。今回のインタビュー参加者はこの専科教員と5年生の担任1名である。

専科教員は中学校で英語教員を25年間経験した後、小学校で3年生の外国語活動指導を1年、5、6年生の外国語科指導を1年間経験している。

担任は小学校勤務11年で、その間、3年生、5年生をそれぞれ1年間、6年生2年間、外国語活動の指導経験がある。今回、主に専科教員から話を伺った。

①テスト

単元ごとに8回とまとめテストを2回、計10回業者テストを使用した。授業は主に専科教員とALTで行っているが、担任のみの授業もあるため、テストはこの担任のみの時間、または学活などの別の時間に行った。内容は5～6分のCDを聞き、writingを入れて30分程度のテストである。テストは、知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう態度の観点ごとに大まかに測れているが、リスニングの点数差はなく、問題数が少ないので点数が取りやすい。よって思考力・判断力で差がつく傾向になる。態度については、忘れ物の有無、授業への参加態度、ワークシートの取り組み状況などを観点として評価した。

また、業者テストのタイミングに合わせて、独自のwritingテストを行い、アルファベット、ローマ字を正しく書けるようになるまで、放課後くり返し徹底して行った。

②パフォーマンステスト

パフォーマンステストについては、専科教員とALTが手分けして児童と1対1のやり取りをした。

点数を3, 2, 1, でつけ、思考判断は何点など、それぞれつけて最終的に総合した。テストのやり方は、iPad等でやり取りを録音し、ALTが評価したものも改めて専科教員が確認し、評価にバラつきがでないようにした。また録音することで担任も確認することができる。

テストの内容は、前期は、テキストのキーセンテンスをもとに、5年生には地図を渡して道案内をさせ、レストランでの注文時のフレーズ、What would you like? How much? 等を使うことができるかを見た。6年生は前期には自己紹介をさせ、後期にはオリジナルメニュー作りに関するやり取りを行った。

授業態度については、前期、後期1回ずつ5, 4, 3, 2, 1, の点数化をして、知識・技能、思考力・判断力・表現力とともに前期、後期1回ずつ総合的に担任が評価した。

いずれにしても、テストで◎、○、△の3段階では測りきれない部分もあり、かつ、小学校で◎だからと言って中学校で5の評定が付くわけではないレベルであることが述べられた。

4 書くことの指導と評価方法

この2校の先生方のインタビューから、特に新たに加わった書くことの指導の取り組み方の違いや評価、特に発音評価に戸惑いがあることが分かった。

そのことから、本研究では、「書くこと」の指導方法とその評価、教員が不安に感じている発音指導について論考することとする。

まず、戸惑いの大きな要因となっている「書くこと」、特にアルファベットを書くことに対する指導に注目する。小学校学習指導要領外国語の目標の目標(5)「書くこと」アを見ると、ここには、「大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。(下線は筆者による) また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。」と書かれており、小学校学習指導要領解説(2017b: 81)には「この目標は、大文字及び小文字を正しく書き分けること、語順を意識しながら、語と語の区切りに注意して、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにすることを示している」と書かれている。

つまり、学習指導要領の「大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする」という目標から

明らかなおと、アルファベットの大文字、小文字は、小学校高学年で習得させておくべき事項である。最終的には、6年生の終わりにはできるようになることが小学校外国語科の目標である。

担任を悩ませるのは、そのやり方である。W小学校のように小テストを繰り返し、徹底的に指導することや、M小学校の担任が選択肢として考えている、宿題として漢字ドリルのように取り組ませる等、ある程度の強制力を持ったやり方を取らざるを得ないのではないだろうかという点で、従来の外国語活動の指導の在り方との違いに戸惑いを感じるのではないかと推測する。さらに、現場では、どこまで手本どおりに書いたものをよしとするかという問題にも直面する。

強制力を行使せずに指導する一つの方法として、文科省動画[なるほど!小学校外国語②]読むこと 書くこと(2020b)で直山は、「書く目的と誰に向けて書くのかをきちんと子どもと共有することで、友達を読み手として意識し、丁寧に書く姿が見られる。書くことがただの作業にならないよう、書く目的、読者を意識させることは、正しく書くことに対する動機づけの一つになり、自ら丁寧に書く意識につながる。」と述べている。アルファベット指導に強制力行使を最低限にし、児童が自らの意思を持って目標に近づく手助けをするためには、読み手意識を持たせることが大事であることが分かる。

このような意識づけをすると同時に、長期に渡る粘り強い指導も不可欠である。次に効果的な指導法として、文科省が掲げる一例を挙げる。

『「指導と評価の一体化」のための学習評価に対する参考資料』(文部科学省国立教育政策研究所, 2020: 85)にある具体的事例を用いた指導事例を見ると、「四線に文字を書かせる際に、四線に文字をおさめるよう、丁寧に書くよう指導を行い、また、ワークシート①に、一生懸命書いたことを称賛しつつも、単語と単語の間にスペースをおくことや、四線を意識して書くともっと読みやすくなるというコメントを添えるなどし、次時に意欲を喚起するようにした。」という事例や、支援を要すると判断された児童には、「おおむね満足できる」状態になるまで個別に担任が授業で継続的に支援をした事例が紹介されている。

しかし、実際の現場で個別にここまで支援ができるかは難しい実情もあるのではないかと思われる。教員への聞き取り調査で出てきたように、ALTに授

業を任せ、担任が一人ひとりを見るのが継続的に行われればできるかもしれないが、原則担任が指導することとなっている以上、大変難しいのが実情である。担任が授業を主導する場合、指導助手であるALTの理解と協力が必要不可欠である。

そこで、筆者は、長期に渡って計画的、かつ段階的に指導をしなければならない外国語教育の特質を踏まえて、児童の学習進捗状況を長期的に記録に残すポートフォリオの作成を提案したい。それを作成することによって、たとえ5年生で達成すべき目標であっても、児童個人の発達段階や資質を考慮し、5年生ではまだできなくても6年生の終わりにはできていることを目指し、長期的に粘り強く、くり返し、学年をまたいで継続して指導していく支援体制ができるのではないかと考える。5年生の発達段階を考慮して、どこまでを指導すべきかという問題も、児童の個人差等を勘案して、6年生には「おおむね満足」になるよう目指していけばいいのである。このように長期に渡る指導を見据え、5年生から6年生への申し送り、さらに最終的には小学校から中学校への申し送りができることが望ましいと考える。外国語活動でアルファベットの大文字、小文字の識別ができ、その名称が分かることが目標となっていることを踏まえると、3年生の外国語活動を始めた段階から、ポートフォリオを作成し、次の学年へと引き継がれていくことがよいのではないかと考える。そうすることで、各学年の担任が、全ての児童がどうしてもこの学年のうちに目標を達成させなければいけないと焦る必要もなくなる。同時に意識が高く、自主勉強等で書いてくる児童にとっては学習の記録がまとった形で残っていくことは大きな励みとなり、さらなる学習に向かう意欲が醸成されるであろう。一人の学習者としての成長、学習の目標への達成状況がポートフォリオという形で残っていくことが児童本人には励みになり、粘り強く学習に向かう態度を育成する助けとなり、担任、さらには中学校の英語教員にとって個人の進捗状況が分かることは指導上の助けになる。英語教育という観点では、学習指導要領は小学校の3年生から高校まで一貫しており、その中でも小中連携は重要事項である。ポートフォリオで学習管理することは児童一人ひとりの学習支援の手立てとして必要と考える。

ただし、ポートフォリオとは本来、子どもの絵などの作品からワークシート、音声まで、その時々のものでできていると判断されるものを教師の助けを得

ながら厳選し残していくもので、学外での学びについても全て保存していくものである。そして、学習者は自らの学びを俯瞰し、何ができるようになったか、次のゴールを自ら設定できるようになり、やがて自立した学習者となっていくことが期待されるというものである。しかし、残すべきものをその都度厳選する必要があるという教師側にとって負担となる作業が生まれる。同時に、時を経れば嵩張り、子どもがいつも手に届くところにおいておくなどということは現実的ではない。そこで筆者は、教師側にとって負担とならないよう、事前に指導計画とともに何を残すかをあらかじめ決めておき、テストや主要なワークシート等を計画的に残していくことを提案したい。実際、英語ファイルと呼ばれるポケット状のクリアファイルを事前に配布し、1年間、外国語活動の全てのワークシート等をその中に保存させている事例を見たことがある。その延長上で、経年で児童の姿と学習の達成度を把握するために、必要なものを厳選して残していくことが、現実的であると考え。または、現在児童は一人1台のタブレットを持っている。このタブレットに学習記録全てを保存していくこともひとつの手立てになると考える。タブレットには音声や動画を録音することもでき、従来のポートフォリオでは難しかった音声データも手軽に保存することができる。こうして、スピーチ等の発表活動も記録に残していくことで、立派な学習履歴が残っていく。従来、ワークシートを使用していた学習をタブレットで行い、音声データも蓄積されていけば、嵩張ることもなく、児童は自宅でも学内でもすぐに学習記録を残していくことができると同時に、自らの学習履歴を振り返ったり次の目標設定をしたりなど、次への学習に向かう気持ちが高まっていくはずである。

文部科学省初等中等教育局視学官 直山木綿子氏は動画『[なるほど！小学校外国語③] 学習評価』(2020c)の動画の中で、「そもそも言葉を身に付けるには時間がかかる。各観点において実現状況が把握できる段階で評価を行うことが大切。評価時期の工夫、評価場面の精選が大切。学習評価から指導の在り方を見直すことも大切。子どもができるようになってから評価する。」と語っている。十分に必要な指導をして、子どもができるようになったと確信が持てる時期が来たら、記録に残す評価をするタイミングを選べばよいと解釈できる。もちろん学年末にはなんらかの記録に残す評価は必要である。前述の

ポートフォリオが評定では伝えきれない部分を補うことができるので、まだ達成度が評価の時期ではないと判断される児童についても、躊躇なくその時点での評価をすることができるのではないかと考える。個別の詳細はポートフォリオに残せばよい。ポートフォリオ評価を取り入れた山中(2020)は、ポートフォリオを使って、教師と子どもと一緒に学習の進捗状況などについて対話する「検討会」の機会を持つことで、指導改善ができた事例を報告している。山中(2020)は、ポートフォリオ評価を計画的に行うことによって、「子どもの学習改善や教師の指導改善、個人内評価を促すことが見えてきた」と報告している。W小学校担任も指摘している通り、外国語が教科となり評価が付くことが、中学校への心の準備になるという側面もあるので、小学校3年生から高校3年生までの長期に渡って一人の学習者として積み上げていく英語学習を継続的に管理できる方法として、ポートフォリオ評価の併用は推奨できるものと考え。

最後に、発音の評価について触れておきたい。文科省(2020c)は「・英語の特徴や決まりに関する事項ア 音声 に関しては、それ自体は観点別評価の基準とはしていない。目標に向けて指導はするが、評価の対象とはしない。」(下線は筆者による)と発音については評価しないと明言している。初めて英語を学び始める児童に発音の間違いを指摘しては、声に出す気持ちをなくさせてしまうからと説明している。もちろん指導者である担任は標準的な発音を聞かせるべきであることは付け加えておきたいが、児童の発音は評価の対象ではないので、評価については不安を感じる必要はない。

5 成果と課題

本研究では、外国語科が教科となり、初めて評価をすることになった小学校現場で実際にどのように評価を行い、そこにどんな課題があったかを探るために小学校2校の先生方にご協力いただき、お話を聞かせていただいた。当初、研究の目的は今後の評価の在り方に対する示唆を探るものであったが、面談をした結果、どちらかという指導への示唆を探るものとなった。まさに「指導と評価」は一体ということが分かる結果である。

課題としては、お忙しい中、時間を割いてお話しいただいたことを、本論文の中で全て反映し、すべ

ての課題について何らかの提案や改善策を示すことができなかつたことが挙げられる。

また、筆者は部外者であるため、実際のテキストや業者テスト、ワークシート、先生方が作成されたテスト等を直接目にして内容を確認することができていないため、聞いた話に基づいた記述となっていることである。しかし、業者テストについては、今後改善の余地があることは明らかである。改善し、学校ごとに独自のテストを作成しなくてもいいようにすることは、小中連携、教育の機会均等において重要課題であると考えられる。

成果としては、教科化した外国語科の指導に対して、担任の先生方が抱えている葛藤や迷いを伺ったうえで、改めて文科省の資料等で確認できた事項があり、さらに、現場で実現しやすいと考えられる方法として、タブレットを活用したポートフォリオの導入をひとつの案として提案ができたことである。しかし、実際に運用できるかは未知であり具体的な案は提示できていないため、今後、学習記録、評価にタブレットを活用している事例等をさらに調査したり、その成果と課題を検証したりして、ポートフォリオのより実用的で具体的な活用法を提示したいと考えている。また、今回、解決策等を提案できなかった事項については、今後ひとつひとつ検証し研究を進めていきたい。

引用文献

- 文部科学省(2017a). 小学校学習指導要領第10節「外国語」156-164. Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf
- 文部科学省(2017b). 小学校学習指導要領解説 第2部外国語. 58-138. Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20201029-mxt_kyoiku01-100002607_11.pdf
- 文部科学省国立教育政策研究所(2020). 「指導と評価の一体化」のための学習評価に対する参考資料. Retrieved from https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_gaikokg.pdf
- 文部科学省(2020b). 動画[なるほど！小学校外国語②] 読むこと 書くこと. Retrieved from <https://youtu.be/983p0QScfSg>
- 文部科学省(2020c). 動画[なるほど！小学校外国語③] 学習評価. Retrieved from <https://youtu.be/O2TrA1K8E64>
- 山中 隆行(2020). 「外国語活動・外国語科におけるポートフォリオ評価」池田勝久(編)『小学校英語「5領域」評価事例集』教育開発研究所. pp.125-129

参考文献

- 池田勝久(2020). 「小学校英語の評価-その基本的な考え方」『小学校英語「5領域」評価事例集』教育開発研究所. pp.10-16
- 文部科学省(2020). 「外国語の指導における ICT の活用について」. Retrieved from <https://www.youtube.com/watch?v=bcANfpMc3m8>
- Annamaria Pinter. (2006). *Teaching Young Language Learners*. Oxford University Press
- Lynne Camelon. (2001). *Teaching Languages to Young Learners*. Cambridge University Press

謝辞

本研究のためにインタビューにご協力くださった小学校の先生方に感謝申し上げます。

(原稿受理年月日：2022年1月11日)